特102

236

聖俳

翁蕉芭

伊賀上野町

日新堂發行

始

特102
236

俳聖
芭蕉翁

伊賀上野町
日新堂發行

大正
11. 11. 14
内交

序

伊賀の山水古來多くの英才輩出少からずと雖も鶏群の一鶴叢中の紅一點としては俳祖芭蕉翁に如くものは蓋しなかるべし寔に世界的偉人として欽仰せらるゝ所以ある哉

近者雲崖白井君刻苦精勵芭蕉翁傳を研鑽編述せられたりついて繙くに祖翁一代風流の經歷行藏大自然に對する俳生活は之を掌中に指すが如く概ね盡して餘蘊なきものゝ如し。

實に祖翁の一生は行脚の生活と謂つべきなり世の風流雅客吾伊賀に杖を曳き祖翁の遺蹟を弔らるゝ指針として此の書を推奬するに憚からず。

予不德の身を以て先輩白井君の著に書すること誠に僭越の極みなれども藝術上風教上其の世道人心に稗益すること尠少にあらずと信じ卷首に書して敬意を表す。

春雨や青苔洗ふ塚の庭

芭蕉翁故郷塚
愛染院現住

大正辛酉春雨蕭々の日

霞村迂史

自序

芭蕉翁は伊賀國に於て呱々の聲を擧げたる人にして後ち俳詞壇上の偉人と稱せらる故に翁の事を傳說するもの尠きに非ず彼を取り是を撮ひたるも正確の事は期し難し姑らく之を管城に付して他日の參考に備ふ。

大正九年九月初一

伊賀　白井雲厓

松尾芭蕉目錄

松尾氏の世系……一
宗房藤堂良忠に仕ふ……二
宗房季吟の門に入る……三
宗房芭蕉翁と呼ばゝる……四
季吟宿志を芭蕉に委囑す……五
良精公芭蕉を別業に招く……八
芭蕉阿波の庄大佛寺に詣す……八
芭蕉の周遊……九
芭蕉大坂に病む……一〇
義仲寺の埋葬……一四

松尾芭蕉目次

目錄

芭蕉の操行……一五
故郷塚及び愛染院……一六
芭蕉の五庵……一七
懐舊二項……一八
蕉門十哲……寶井其角・服部嵐雪・各務支考・内藤丈草・向井去來・森川許六・立花北枝・河合曾良・越知越人・志田野坡……一九
附錄……北村季吟・山口素堂・平野杉風（小傳）……二九
書翰……四通……三四

終

松尾芭蕉

伊賀白井雲厓編

松尾氏の世系系統

伊賀國の地は昔しより壽永の時代に至るまで多くは平氏の領有たりしが就中づく平の政盛の子孫に右衛尉平の季宗といふ人あり其子に彌兵衛尉宗清なるものは平の清盛の一門にして壽永の時に平氏が西海に沒落せんとするに當り頼朝は宗清の奮恩を思ひ是を鎌倉に迎へて優遇せんとす宗清辭していふ余れ取て禍福を辨ぜざるに非されども獨り西海に趣かるゝ諸公及び同僚に愧ぢざらんやと遂に身を伊賀の山中に潜めたり頼朝は宗清の意志遂に翻へす可らざるを以て伊賀國阿倍山田三十三邑の莊園を付して養老の地と爲すと云蓋し頼朝嘗て父義朝が清盛の爲めに誅せらるゝに當り頼朝も捕

へられて將さに斬れんとす宗清は賴朝の幼稚なるを憐み清盛の後母池の尼に因り其死を赦されんを請ふ池の尼問ふていつ其容貌は如何なるぞ宗清對へていふ酷だ右馬君に肖たり右馬は尼の子にして蚤く死せしものなり尼之れを聞き感慟胸に塞がり泣て其死を赦さんを乞ふて止まず清盛止むを得ず是非なく尼の乞ひを以て其死を赦し蛭が島に流すことゝせり他日賴朝が風雲に乘じて龍興し覇府を鎌倉に開くを得たるは實に宗清の恩惠に因るなり其後ち宗清の子孫世々阿倍郡拓植の庄に住居せり（阿倍郡は今の阿山郡なり）其子數人あり家を分ちて山川勝島西川松尾北川等を唱ふ其後に至り松尾與左衛門といふ人初めて國都上野赤阪に來り住す與左衛門の妻は伊豫國の人ぞや姓氏詳かならず其子二男四女あり長は半左衛門命清こいふ藤堂主殿長基に仕ふ次は金吾宗房なり後ち金作又は忠左衛門ぞ呼ぶ風羅坊桃青釣月堂船堂芭蕉庵などの號あり。

宗房藤堂良忠に仕ふ

明歴の頃伊賀國の重臣藤堂新七郎良精の世子主計良忠は宗房が幼にして才幹あるを以て召して近侍ぞなす時に年十餘歳なり良忠文武を講求し暇まあれば俳句を學ぶ京都北村季吟の薫陶を受け傑作も亦た尠からず蟬吟と號す其吟咏に（大阪や見ぬ世の夢の五十年の句あり）宗房の良忠に事ふるや君臣相敬愛して魚水の親み益ます深く常に良忠に侍し傍ら文武を學び俳詞も亦た良忠の指導を受けて漸や見る可きものあり寛文六年四月良忠病あり遂に歿す宗房大に慟哭し自ら遺髪を奉じて紀伊の高野山に詣し之れを報恩院に收葬し歸り來り將さに殉死せんとす此時に當り幕府は殉死の禁令を發したるの故を以て良精君は宗房の請ひを許さず宗房は良主を失ふて怏々落魄して望みを仕途に絶ち將さに世を辭せんとす良精君は宗房の俊才將來大に望む所あるを以て之れを慰め堅く之を留む宗房一夕主家に直す深夜窃かに門傍の松樹に縋がり而して脱出す時に隣家の城彌太郎の門柱に一吟を掲げ置けり（雲と隔つ友かや雁の生き別れ）又一説に隣家鳥飼某の軒に掲げたりとも云ふ時に寛文六年四月にして年二十三なり。

宗房北川季吟の門に入る

夫より直ちに去つて京都北川季吟の門に入る益ます斯道を研鑽し大に得る所あり頗る同生を凌駕す又た伊藤坦庵に就き經書を學ぶ傍ら季吟の著作を助く寛文十二年季吟幕府の召に應じ江都に下る同十三年一月宗房上野に來り菅原神社に短句三十番を奉献す時に年二十九延寶二年江都に至り平野杉風氏の家に寓す蓋し季吟の同門生の親みあるを以なり是時に小石川區關口に水道工事あり宗房は推撰せられて修築の事に參與す時に年三十一宗房或る日杉風に語つていふ暫く紅塵を避けて山中に入らんとす杉風申すには目に紅塵を見ず耳に車馬の聲を聞かざれば則ち可ならずやとて之れを留どめたり。

宗房芭蕉翁と呼ばゝる

是に於て己が別業の深川六間堀に在るものを結びて草庵となし此に移らしむ杉風別業二か所あり一は抹茶庵といふ一は芭蕉庵と云宗房の移る所は芭蕉庵なり庭前に芭蕉あり宗房これを増植して其繁茂するを見て樂みとなす以來人々は芭蕉翁と呼び其名ます〳〵弘まる芭蕉は季吟に學び出藍の名

四方に嘖々たり笈を負ふて來り學ぶもの日びに多し螺舎其角も此時門に入る或る日杉風は家僮を召し連れ草庵に來り泊船堂の三字を書し扁額となし且つ又た灑掃採薪設食の事にも心を配り周旋至らざるなし夫より對座して俳諧を談するに芭蕉のいふ所の論は高尚にして其趣甚だ深ければ杉風大に之れに感じいよ〳〵敬ひて親交すること益ます深し。

季吟宿志を芭蕉に委囑す

ある日杉風芭蕉を伴ひ小川町に至り季吟の安否を尋ねしかば季吟も大に其厚情に感じ之れを迎へて一室に延き別後の疎情を述べ昔を語り今を問ひ且つ芭蕉の未だ二毛の年に至らずして風流の爲めにいとも枯徜せし姿を見て實にも斯まで風流に心を傾けられしものかとて頻りに落涙を催されしが漸ありて嫡子湖春を召し芭蕉に引合せていふ愚老は貞德翁の門人ながら俳諧に志厚く慶安元年二十九歳にして山の井を著はし明歴二年三十七歳にて蠡集を作り萬治三年四十一歳にて新大筑波を編み其の山の井を増補して斯道に力を盡すと雖もいまだ發明する所あらず且近頃歌學所の命を蒙り東

都に下りしよりは和文の諸抄に擱筆の暇なければ衆を領し風を正すの功をなしがたし足下斯道に生質自得の奇才なれば愚老が志を繼ぎて世間俳諸の弊を矯め有志の俳諸を著はし萬代不易の基を開き給ひ愚息湖春も向後の俳諸に就きては足下の指揮を受けしむべし是に於て湖春に命じて芭蕉を師とし敬まはしめかば芭蕉大に驚き我れ爭でか斯る過分の禮を受くることを爲さんや殊更有志正風の俳諸を開かんこと孤陋過分の身に應ぜず願くば赦され給ふべしと頻りに固辭すれども季吟之を諾せず我れ年既に五十七將に耳順に垂ゝしていまだ俳諸の目を開かず何れの時か發明の期あらんしかし宿志を足下に屬して今より後は俳事をせざるべし偶ま一句の出づる言有るも足下の批判に預り申さん其しるしに愚老が曾て記し置きたる一書あり京極黄門の御說心敬僧都の教宗養の口訣紹巴の口傳のしな〳〵先師長頭丸の秘訣を編みて窃かに埋木と題し置けり今之れを足下に讓り申すべし用ゆる所あらば取り玉へゝ傍の文庫を探り取り出して芭蕉に授ければ芭蕉謹んで之を受けいよ〳〵師恩の厚きに感じ遂に之れを納めけるが生涯の寶として東西南北の旅行にも片時も身を離さゞりしと云後ち浪花にて病没の後門人等衆議して芭蕉の郷里上野に送りしこかや是より四人相共に膝を交へ古今

の風調當時の流行を論じ閑談數刻に及びけるが俄かに迅雷起り强雨沛然として窓を打しかば湖春はあら面白やとて（天地のはなしとぎるゝ時雨かな）ゝ口吟みしかば芭蕉之を聞きて誠に風聲は乾坤の言語なりとの事なれば殊に感ありと賞嘆せしかば實に古人の句は聞くに感ありて吟ずるに餘情あり彼の（世にふるも更に時雨の宿りかな）ゝ宗祇法師の悲まれしこそ心深くは思ひ侍るにかゝる心を俳諸に作らば足下は如何思ひ給ふぞ芭蕉答ふるには我も常々此句を吟じては喜こび居しが此頃深川の草庵に手づから雨の佗笠さはりて（世にふるも更に宗祇のやどりかな）と落書をなして侍りぬと答ければ其時季吟は手を拍て大に感じ吟じたり〳〵小町が鸚鵡がへしの歌は疑ひのや文字を決定のぞ文字に代へて心を其儘に用ひたりしに今は時雨を宗祇の名にかへて時雨のやどりと見せし宗祇も元と無常速迅のことわりを逃れざる所さらに宗祇のやとりどは是れ俳諸の頓挫にして連歌にまされる向上の一路此筋より誠の道は開けぬべし遊鵠の獨運して鵠霄を凌摩せんこゝ日を算し指を屈して待つべしと賞感限りなかりけるに杉風もあまり季吟の機嫌っるはしく浮き〳〵と悅び玉ふこゝの珍らしきよこて一句を吟じて差出すを湖春は之を取りて讀めば（僧うかれけり松はひとりに里時雨）

とありければ一座笑を催したりしがやがて辭し去りたり。

良精君芭蕉を別業に招く

又た芭蕉の上野に來るや舊主良精居は芭蕉の忠節を思ふて忘る能はず屢ば鳴鹿坂の別業に引見し厚く之れに遇す芭蕉庭櫻の下に徜徉し既往を追懷し詠句あり（様々の事思ひだす櫻かな）良精君併名を探丸子と云ふ脇句を附せらる（春の日はやく筆にくれゆく）以來此の別業を稱して様々園と云へり。

阿波の庄大佛寺

芭蕉又た阿波の庄大佛寺に參拜す（今の阿山郡阿波村大佛寺なり）此の阿波の庄は南都東大寺の聖僧俊乘上人の舊跡なり一時此寺は破壞に歸し仁王門及び鐘楼は草莽の間に隱顯し蓮華座獅子座は苔蘚の爲めに浸蝕せられて其間に空しく佛位を拜するを得て泫然として涙を垂れ吟詠あり（丈六に陽炎高し石のうゑ）其二（入かゝる日もいと遊ぶの名殘かな）

芭蕉の周遊

貞享元年芭蕉年四十一江都を去つて甲府に遊ぶ是より殆んど十年間周遊を事とす破笠弊履四方の高山大澤を跋渉し蛇龍の蟄窟に朗詠し狐狼の棲林に閑吟し陶然として水光を玩び山色を愛するもの實に詞場の奇傑と謂ふ可し元祿七年に至りて暫らく江都にありしが五月十一日深川の庵を出發して此の日島田驛に至れば大井川出水ありて塚本氏の家に逗留し詠句あり（さみだれの雲吹きおとせ大井川）其二（ちさはまた青葉ながらになすびかな）夫より此を出て嵯峨へ越し去來の落柿舍に會し（柳こり片荷はすゞし初眞瓜）下旬入洛す六月十六日膳所菅沼氏の曲水亭に會す（夜寒の題に乳麺の下燒立る夜寒かな）其二（夏の夜や崩れて明しひやし物）廿一日大津木節の亭に會し七月上野に歸り祖先の祭儀を愛染院に行ひ（家は皆な杖に白髮の墓まいり）同月二十八日窪田猿雖の亭に會す（九月八日各務支考廣瀨惟然を從へて上野を發し奈良に至る重陽の日（菊の香や奈良には古き

佛たち）其二（ひいとなく屁聲かなし夜るの鹿）を吟じ十三日大阪に入る蓋し大坂門人の招請する所あるを以て其招きに應ずるなり此の日門人支道の家に寓す門人皆な翁の來るを聞き欣然相慕ふこと赤子の慈母に於けるが如し翁を迎へて饗宴を開く者は是れ日も足らずと爲す二十九日園女亭に臨みて（白菊の目に立てゝ見る塵もなし）の一吟をなして歸れり。

芭蕉大阪に病む

然るに三十日翁俄かに泄瀉病に罹る此日兼て芝伯亭に一集すべき約ありしが出席なし發句のみ贈らる（秋深き隣は何をする人ぞ）此夜より頭痛の氣味あれども常の瀉ならんと思ひて藥店の胃苓湯を服し給ひしに其効なく十月一日二日と押移りしが惟然支考内議していかなる良醫なりとも招き候はんと申ければ翁いふ我れ元より虚弱なり心得ぬ醫に見せ侍り藥力如何あらん我性は木節ならでは知る者なし願くば木節を急に呼んで見せ侍らんとて大津の居所へ書狀を出し又た翁の兄松尾半左衛門氏并びに門人土芳皐袋へ書狀を差出さんとするも伊賀常飛脚これなく幸ひ羅漢寺の弟子伊賀へ越し候につき夫へ托したり京都の向井去來は關西の俳壇を預つて居る人物にて翁の信任も厚く是へも消息遣はしたり三日門人等翁の靜養の所を擇び御堂前南久太郎町花屋仁左衛門の別亭に移る同亭は間所も數ありて亭主が物數奇に奇麗なり諸事の勝手宜し此夜子の時木節は馳せ來り直ちに師の容體を診し主方逆逆湯を調合す間もなく去來も來り丈草乙州が輩も聞くに從ひて來訪し病牀にいたはりつかへける木節卽ち去來に語つていふ師の病大に篤し願くば他に良醫を求めて之を診せしめん貴坊此意を師に通ぜしめよ去來卽ち此事を翁に告ぐ翁いふ木節の申し呉るゝ事實に至れり然れども假令如何なる僊法ありて虎口龍鱗を醫すとも天業まさに如何せん我れ斯の如く悟道せしを以て我が呼吸のあらん限は木節の神力を服せんのみ何ぞ他に求むる所あらんやと其主方を感ずること斯の如し然るに翁の病日を經るに至りて追々危險に趣き只今の模樣にては快復覺束なしと見へたり八日門人ら相議していふ未だ伊賀より音信なし今より態飛脚を差立つ可くと師に申ければ師のいふ我れ隱逃の身として虚弱なる身の數百里の飛杖思ひ立ち親族より留めけれど心儘にせしは我が過ちなり今大病と申送りなば一類中のさわぎ殊に主公の聞こしめしも恐れありたとひ今度大切に及ぶも沙汰いたす

まじとのたまひけり師の慮の深きこと各の感心せり此時下痢度數六十度に及び諸國の門人翁の病を聞き傳へて訪問するもの日びに多し支考乙州は去來に何かさゝやきければ去來心得て病牀の機嫌を計らひていふ古來より鴻名の宗匠多くは大期に辭世ありさばかりの名匠の辭世はなかりしやと世にいふもの有べしあわれ一句を殘し賜はゞ諸門人の望み足りぬべしと師は次郎兵衛に助け起され息つぎ給ひて曰く昨日の發句は今日の辭世今日の發句は明日の辭世吾れ生涯言捨し句は一句として辭世ならざるはなし若し吾が辭世何と問ふ人あらば此年頃云ひ捨置し句何なりとも辭世なりこ申給れ諸法從來常示寂滅相これら是れ釋尊の辭世にして一代の佛教此の二句より外はなし（古池や蛙飛込む水の音）此句に吾が一風を興せしより始めて辭世なり其後百千の句を吐くに此意ならざるなしとて氣息やゝ迫れるものゝ如し九日看病人の取計らいにて古き衣裳を脱がしよき衣物を召させ夜具の垢付たるを取換へたり師のいふ遠地波濤の邊りに草を敷き塊を枕として終りを取る可き身のかゝる美々敷褥の上に然かも末來までの友達賑々敷付添ひ鬼錄に上らんこと受生の大幸なり十日病益ます甚し沐浴を命じ身を潔め病牀を掃らい自から遺書を認め併賀の兄松尾半左衛門に贈りて後ち一吟をなしていふ（旅に寢て夢は枯野をかけ廻る）是は辭世に非ず辭世に非ざるにも非ず病中の吟なりしかしかゝる生死の大事を前に置きながらいかに生涯好みし一風流とは云ひながら是も忘執の一ともいふ可けん去來いふ左にあらず日々朝雲暮雨の間も置ず山水野鳥の聲を捨給はず心身風雅ならざるはなく河漁の思ひに勞れ給ひながらいまはの限りに其風神の名章を唱ひ給ふこと諸門葉の悅び他門の聞へ末代の龜鑑なりこ涕をすゝり淚を流す十一日東武の其角來る其角は泉州より浪花に打入りしが計らずも勞みをはすと聞付けそこ羌と尋廻り漸く馳せ付たり直ちに病牀に參れば師も見やりたる迄にて唯々淚ぐみたまふ其角も言葉なくさしうつ向き居たりしが丈草去來支考其外の衆次の間に其角を招き病床の始終を物語る夜半頃より寒熱往來し夜明け頃より顏色土の如く左右に舍羅呑舟後ろに次郎兵衛抱きまいらせて介抱し程なく夜明ぬれば十二日なり豫て閉籠り給ひしが隔の障子襖も取り離させ去來其角丈草をこれへと招き給ひ穢がれを憚れば思尺し賜ふなとここわり乙州正秀を左右にし支考惟然に筆を取らせ亡き跡の事こまゞゝこ遺言したまふ病苦少しも見へ給はず人々奇異の思ひをなしたりしが言ひ終りたまひて餘言なし合掌正しく觀音經こ聞へてかすかに息の通ひも遠く

なり申の中刻すぎ埋火のあたゝまりのさむるが如く次郎兵衛が抱きまいらせたるに依り掛りて笑を含みて瞑せり年五十一なり。

義仲寺埋葬

門人ら議していふ伊賀よりは未だ何の沙汰も是れなきも最早猶豫も出來難し師の遺言もあれば粟津が原義仲寺に葬むることに定め其夜ひそかに商人の用意にこしらへ亡きがらに物うちかけ長櫃に納め去來乙州丈草支考惟然正秀木節呑舟次郎兵衛ら葬事を擔當し淀江に溯り十三日朝伏見に着し夫より粟津に至るさて又た過る二日に彼の羅漢寺の僧に伊賀への書面を托したるに彼の僧は奈良まで至りしに俄に痢病を起し滯留す十一日に至り漸く伊賀上野に行く人あるを聞き右の書面を賴みけり此書面は十二日暮過ぎに上野に着す土芳卓袋ひらき見て大に驚き直ちに松尾氏に至れば半左衛門は瘧疾に罹り伏し居り因て土芳卓袋の二人は火急に身ごしらい致し深夜に出立して暗がり峠を越へ大阪久太郎町花屋に驅けつけたるは十三日黄昏にして仁左衛門に尋ぬれば昨十二日死去せられて粟津へ埋葬することになり其夜門人衆は靈柩を護しいづれも出立せられたる跡なりと然らばせめて葬式になりとも逢ひ奉らんとて土芳卓袋の二人は飛ぶが如くに八軒屋に驅け行きければ幸ひ出船あれば直ちに打ち乘り伏見京橋へ着せしは夜の明け方にて此を出て狼谷にかゝり義仲寺に着したるが未だ納棺し給はざる前なりければ師の死顔の麗はしきを拜し悲歎限りなく諸士に斷りて一夜も病座に侍座せざるをかきくどきけれども先づ以て葬式に連るを得るは因緣のあること身に餘る幸ひと申ける又た翁の遺骸に被らしたる淨衣は智月尼が裁縫し其子乙州の妻は被せ替へ十四日夕方木曾塚の右にならべ埋葬せり葬りに會するもの三百餘人。

芭蕉の操行

翁を義仲寺へ埋葬したるは繪詞傳にある通り翁の常に言つて居られしことを弟子が記憶して斯く計らつたことである翁が此邊の景色を愛したことは非常で幻住庵の記を讀んで見ても明である其吟咏も尠からざるなり今此の二吟を載す（まつたのむ椎の木もあり夏木立）其二（比良三上雪さしわ

たせ鷺の橋）翁の心では幻住庵の邊へ身を埋めたく照ひしが夫では墓參して呉れる人に對して氣の毒だから木曾殿の塚にならへて葬むることにしてもろはふと云て居られた趣である又た翁の詩想に富たるは夙に老莊の學を修め虛無恬淡の眞意を解し且つ禪機に通じ悟道極致に達す加ふるに杜律の風骨を探り一機軸を出だし俳風を一變して所謂正風體なるものを振興し遂に一派を創始す其著書には貝をほひ冬の日春の日野ざらし紀行鹿島紀行女の小文更科紀行奥の細道ひさご佐賀日記猿蓑續猿蓑炭俵芭蕉首句集文集等あり世人の能く知る所なれば今まこれを記載せず。

故郷塚及び愛染院

故郷塚は上野農人町字東出愛染院内にあり松尾家の菩提所なり元祿七年十月十二日翁の大阪にて歿するや門人ら遺命を奉じて十四日に粟津が原に埋葬を終へ土芳卓袋ら遺髪を携へて上野に歸り之れを院内に埋め一の小茅庵を建設して碑を藏す院内には俳道に係る書籍遺物幷に寄贈品數點あり實に一遊す可き所なり。

愛染院は元曆年間人皇八十二代後鳥羽帝の御宇山城の國醍醐寺憲深僧正附法の孫弟日向鏡覺阿闍梨は此地に來錫して創立せり本尊愛染明王は後鳥羽帝御惱みにて祈願の叡旨を憲深僧正に賜り愛染明王秘法供を修行するに光明赫灼として尊像より靈光を放ち御平癒あらせられ給ふ其靈驗に因り遍光山願成寺愛染院と稱す堂宇輪奐を極めたるも天正九年織田の兵火に罹り烏有に歸す然る後ち實惠法師再興して之を當院中興とす創立以來六百八十餘年の星霜を閲し寺院荒廢を極めたるも明治時代に至り先師光照僧正晋住は漸く現狀に改めたり眞言宗豐山派にして本山は京都御室御所直の處明治四十三年豐山派總本山長谷寺直末に轉換す。

芭蕉の五庵

無名庵は上野赤阪町松尾半左衛門庭中にありしと云

瓢竹庵は上野東日南町岡本蘇苔邸内にありしと云

東籬庵友西麓は上野田端町の窪田猿雖の別莊内にありしと云

簑蟲庵は上野西日南町服部土芳の別野なり

以上是を五庵といふ翁が歸郷の節は隨意に此の庵に徜徉せり今は一の簑蟲庵を存するのみ此の庵は西日南町の南端にあり庭園幽淸にして四時の風光に富む詩人墨客の遊ぶべき處なり遠くして連山の翠を挹むべく近くして田蛙の聲を聽くに堪へたり翁曾て此庵に遊び（簑蟲の音聞にこよ草の庵）の句あり簑蟲庵の號こゝに始まる翁の世を去りし後ち服部土芳は久しく居住せしに四方の人々簑蟲句の名高きを以て是を訪問するもの頗る多し享保十五年土芳歿し後四十餘年の霜雪を歷て垣離仆れ檐廂破れしを桐雨と云ふ人翁の遺跡のすたれたるを惜み此の庵に居住し破れを繕ひ舊貫に復したり（春雨にむかしの色や庭の草）の吟あり此後家主屢ば換り今は菊本氏の所有となれり庭前に翁の手植の松あり又た遺品も數點あり。

懷舊二項

鳴鹿坂の樣々園は維新の際に當り此の園まさに他人の所有と爲らんとす此の時に町井臺水翁は樣々櫻が樵父の手に落ちんとするを憂ひ俄かに薪木五十貫を購求し之れと交換して愛宕町の邸内に移植してこれを愛玩せしが其後臺水翁は歿せられ此櫻も續て枯死した園は今ま濱邊氏の別業となる

芭蕉翁の飲用水は翁の初め藤堂良忠に召用せられ鳴鹿坂の邸宅を與へられた其遺跡は今ま中森氏の邸園となる翁の飲用せられし井水は甚だ淸冽にして同氏の愛飲する所なり。

蕉門十哲

寶井其角幼名を源助と云長じて順哲と稱す又た寶晋齋善哉菴文合堂六病菴の號あり寛文元年東京堀江町に生る幼にして敏慧なり草刈三越に就き醫術を學び服部寶齋に從ひ儒學を修め又た畫を英一蝶に學び其他の諸藝通ぜざるもの稀なり延寶五年蕉門に入る時に年十七蕉門中學才第一と稱せらる後ち居を芝神明町に移す家荻生徂徠に近し之を冷評して曰く（梅が香やとなりは荻生總右衛門）時に徂徠は一世の鴻儒と稱せられ人々之れを敬重するも之を冷評して細行を顧みざる其豪放見る可きなり又た雨を祈るの吟あり（夕立や田を三めぐりの神ならば）後人の稱揚する所なり平常李太白

の風韻を追慕して豪飲醒日なし寶永四年四月歿す年四十七著書若干あり。

服部嵐雪幼稱久米之介後改治助淡路國三原郡榎並村の人なり江都に來り新庄隱岐守に仕へ後ち井上相摸守に仕ふ風雅の志忘れ難く幾くもなくして仕を辭す其邸宅を去るに臨み衣服刀劍其他の什器棄て省みず廉潔想ふ可きなり蕉門に入り斯道を研鑽し去來ミ名を均ふするに至る又た妻烈女は常に唐猫を愛す造次顚沛も其側を離さず嵐雪猫を好まず一日烈女は外出せり嵐雪潛かに猫を遠地に捨つ日の暮るゝに及び烈女歸り來る嵐雪知らざるものゝ如く隣家の女窃かに其實を告ぐ烈女憤恚して是より家庭の風波常に絶へず門人其間に居て屢ば和解の勞を取れり嵐雪夫妻爭論して人の笑ひを招くを以て一吟を發す（悅ぶを見よやはつねの玉はきう）又た平安城の景色を讀める（蒲團きて寢たる姿や東やま）吟咏は人口に膾炙する所なり妻烈女死して後ち僧となり一生を送る寶永四年十月歿す年五十四。

各務支考美濃國大智寺之僧なり常に出遊を好む東に遊べば東華坊と稱し西に遊べば西華坊と稱す弱冠にして禪僧に參し才氣あり儕輩に忌れとなる遂に寺門を出で伊勢國山田に閑居し夫より蕉翁に學び許六と相伯仲す又た名古屋の巴靜と熱田より海に航して將さに桑名に至らんとす眸を凝せば遠山は殘雪を駐め近嶺は暖烟を抹す一碧の海上に白帆泛々たり巴靜は支考の背を叩いて曰ふ風光此くの如く一吟なかる可らず支考笑ふて曰く古人言ふ絶景に對して啞す二人相見て曰く然り元祿七年十月翁の病大に晋むに當り門人等看護中に翁を慰むるの一吟あり（叱られて次の間へ出る寒さかな）寛永七年三月翁の門人相集り翁の碑を東山雙林寺に建つ碑銘は支考の撰なり（碑文略す）支考は寛文五年を以て生れ享保十六年二月を以て歿す享年六十有七なり。

内藤丈草犬山藩之重臣なり幼にして林之助と稱し後ち林左衛門と改む資性曠達にして學和漢を究む又た繼母に事へて孝順なり弟某は繼母之出なるを以て家を弟に讓らんと欲す故らに右手を傷め刀柄を握り難しと稱し遂に士籍を脫し素志を達して以て禪に歸す蕉門に入ると雖も敢て苦學せず事に感じて吟じ物に當て咏ず然れども秀吟名句多し蕉翁曰く若し一段の研究するを得ば人之下風に居る者に非らずと元祿七年蕉翁病革まるに及び之を慰めん爲めに門人等看護中各の一吟を發す丈草の吟に（うつくまる藥の下の寒さかな）蕉翁歿後丈草同志と相謀り粟津義仲寺の山上に一の草菴を建て

之れに住し日夕經を誦して蕉翁の冥福を祈ると云寳永元年二月歿す年四十二。

向井去來名兼時字は善焉通稱は平次郎後ち次郎太夫と改む肥前國長崎の人なり世々儒を以て顯る父玄膳微されて朝廷の醫官となる去來父に從ふて京都に移る元祿初年蕉門に入り學力は嵐雪と相伯仲す蕉翁歿するに及んで師道を維持し正風俳諧益ます隆盛を極めたるは實に勉めたりと謂ふ可し其吟に（應々といへど叩くや雪の門）同友の歎賞する所なり又た蕉翁の猿蓑集は翁の遺志を受けて後進の便を謀り編集するものなり蕉翁の遺物に烏羽の文臺あり蕉翁歿するに及んで翁の兄松尾半左衛門と往復の書あり茲に之を載す。

頃日土芳皁袋歸りの砌申進候苦の處取紛失念候故今日一人差立申候先以長々御所勞未御快無御座旨乍憚御自愛專一奉存候此間兩雅丈より被成御聞候通亡師一七日於御靈前御追善之百韻首尾能興行相成何れも滿足仕候然れば其席に御傳來の烏羽の文臺を立申候此文臺の事は御聞及も候半季吟老人より亡師に御禪と風雅傳來の雅物に御座候根元玄旨法印より紹巴に御傳被成貞德季吟亡師と傳り候如斯の重器に候得ば亡師一代尋常の俳席には御用ひも無御座候深川之重器と承り候迄に然に先年猿蓑集撰成就仕吟聲の砌深川より御取寄に相成其儘に義仲寺に差置かれ候亡師も御門人の中に御傳可被成御心にも可有御座候得共亡師は一體此俳諧の事左樣なる俗事に御頓着なされ候御氣象にては無御座候全體隱逸禪中風雲の行狀に候得ば傳不傳の所にては無御座候併此後は其場にては濟不申此度此儘に打捨置候得ば一道立不申永く芭蕉門埋め候かとも存候幸此節其角參り居られ候故於江戸其角嵐雪と申ては左右の御手と被思召無二の御愛弟に御座候夫故御靈前にて右文臺讓りの事申問候得共其角頻りに辭退にて一昨日罷歸申候許六は病身木節は老衰美濃尾張は遠方にて手屆不申外には若輩の者ばかり故一先右文臺は義仲寺眞愚上人に預置一二年も過候はゞ若年の者共拔群の者も出來可申上人に申問候得ば路傍の廢寺風火災又は賊難を恐れ貧地獨居不任心底と申候斷に御座候唯今にては預置くべき處も無御座候道心の御人體に候得ば兎角可申入筋も無之此上は右の雅物に候條貴方に御預置可被下候來春に成候ば拙者以參御熟談も可仕候即ち右の品此者に持せ進候諸事御賢察可被下候。以上

十月二十七日　　向井去來

松尾芭蕉

松尾半左衛門様

右に對する返書

貴翰捧讀先以此間前後の御取計重疊御勞煩被成下忝奉存候然ば鳥羽の文臺の事仰聞られ逐一承知仕候如貴命右文臺の事は日外亡弟よりも承り至て大切なる雅器に御座候由右の器物引讓り之事御心配の段御尤千萬に奉存候然るに其角よき時節に參合居られ辭退の儀手前も不承知に存候芭蕉門人に其角嵐雪と申事は日本に俳諧を好むもの不存者無之候然ば門人中に何人か違背の御人可有之共覺へ不申右に付ては拙者より御賴も可申候得共歸郷に成候と申事に候得ば不能其義候且又眞愚上人御返答之儀は御尤の事と奉存候將又拙者方に暫く御預可被成旨併し我等事は肉身の事に候得共俗士の事に候得ば風流中の品物暫くと預り候境界に無之候何分にも是は雅物の事に候得ば貴雅方に手前より御預け申度候仰の通り明春にも成り候はゞ拙者罷越拜面の上兎も角可仕候是非々々讓方無御座候ば季吟之未存生の事に候得ば元之通り返上可仕とても先夫まで貴雅方に御預置可被下候偏に奉願候左候はゞ芭蕉の魂魄も可爲滿足候草袋土芳より始末承り候恐

惶謹言

十月二十九日

向井去來様

松尾半左衛門　命清判

右に對し鳥羽文臺等は去來に於て預る事となりしかば去來は其預り書を松尾氏に送れり如何に綿密なるものか左に記する所を見るべし。

鳥羽文臺

黑塗長一尺九寸

板厚三分

一脚

幅一尺二寸　高四寸

筆返一尺一寸

右は師嗣相承之印季吟翁より先師へ御相承被成候重器に候今度拙者に御預け可被成旨に付慥に預り置申候後證如件

元祿七年甲戌十一月四日

松尾半左衛門様

松尾芭蕉

向井去來

但し三ケ所疵二ケ所は小指の先程一ケ所は小きすれ四方の角損じなり。

去來初め洛西嵯峨の小倉山に一草庵を結びたり庵の傍ら數十の柿樹あり一夕實熟して頻りに墜落し屋上を跳り下りて聲あり菊亭内府公是れを聞き落柿舍の號を書して之を賜ふ時人大に之を榮とす

晩年に至り洛東聖護院の邊に隱栖す寶永元年九月歿す享年五十四。

森川許六名は百仲字羽官通稱五助近江彦根藩之重臣なり人となり聰慧畫に巧みなり俳諧は芭蕉に學ぶと雖も畫は芭蕉の師たり其居を五老井と云ふ四絶勝あり草字藤、揚揮豆、紫芝園、雲花園、是なり晩年に至り癩病に罹り常に一室に閉居す客あれば屏風を蔽ふて談ず金澤生駒万子なるものは莫逆の友たり特に一室に延いて之れを欵接す萬子は臭氣雖ニ撲ニ鼻一更に意に介せずと云許六は常に才能を誇る其の著す所の直指の傳の如きは自負を免れずと雖も同氏の氣概を見る可し雨後の吟あり曰く（陽炎や壁のぬれたる夜の雨）正德五年八月歿す享年六十。

立花北枝は加賀小松の人なり金澤に住し研刀を以て業こなす蕉門に入り研鑽の功を以て北方の覇權を握るに至る吟咏あり曰く（夕風に何吹あげておぼろ月）實に百尺竿頭を傳たひ得たる妙手段と謂ふ可し友人に從吾こいふあり交接親密なり從吾病に臥するに及び日夜訪問して看護至らざるなし其病危篤なるに及んだ俄然訪問を斷つ人皆な北枝が薄情なるを怒る既にして從吾歿す北枝之を聞て馳せ來り死屍に就き泣て曰く從吾從吾汝ぢ我を捨てゝ逝く慟哭絶倒せり且つ謂ふ一時訪問を斷つ者は死別の情に堪へざるを以なり聞く者之を諒とせり享保三年五月歿す享年不詳

河合曾良は信濃國諏訪の人なり惣五郎と稱す初め木曾福島藩に仕ふ後ち流浪して甲斐に至る蕉翁の此地に遊行したるに遇ふて師弟の交りを爲す自是翁に從ふて江都に至り芭蕉庵の下に一小廬を結び翁の爲めに薪水の勞を取る其後ち翁に從ふて松島象潟の遊を縱まゝにせり寛永六年十月歿す享年詳かならず今ま其の吟咏の一を載す（うき時は墓の遠音も雨夜哉）

越知越人名氏恒初の七兵衛と稱す後ち兵太夫と改む佐分利家に養はる熊本之藩士なり後ち養父罪あり俸祿を沒せらる養父氏恒をして生家へ歸らしめんと欲す氏恒泣き且つ嘆して曰く今や佐分利家は藩籍を失ふと雖も飽まで孝道を盡すは兒の願ひなりと遂に養父に從ひ美濃の加納に移る其の後ち父歿し江戸に行き芭蕉翁の門に入る其の一吟を載す（うらやまし思ひ切時猫の戀）元祿三年十月赦

に遇ひ熊本に歸り俸祿三百石を給せらる同十五年三月歿す年齡詳かならず。

志田野坡は越前福井の人なり彌助と稱す江都に出で蕉翁に從ふて學ぶ後ち大坂に移る晩年に及んで翁の無名菴を高津に移して之れに住し自から高津翁と呼ぶ吟咏あり曰く（此ころの垣の結めや初時雨）家貧にして泰然自若たり一夕盗兒あり野坡の家に入る野坡は盗兒に謂ふて曰く家貧にして一片の貯物なし只だ少量の茶あり一啜して閑談を共にすべしと盗兒首肯し其の放膽を感じ我が携へたる品をも置て辭し去る野坡は完文三年に生れ元文五年に歿す享年七十八。

松尾芭蕉 終

附錄

夫れ芭蕉翁の俳壇上に覇名を得たるは其師北村季吟の薫陶にありと雖も翁の濁貧生活に安じ其成功を得たるは知友山口素堂平野杉風の救援によること豈少小ならんや因て爰に三氏の小傳を載す。

北村季吟

北村季吟は通稱久助又た拾穗軒廬屋湖月齋七松子の號あり父は江州北村の人にて宗龍と云連歌香道に達し醫を業となす季吟は家庭的感化を受けたり初めは京都山伏町に住し後ち新玉津島社の境内に棲む社祠となつて專ら國學を研窮し源氏物語の如きは能く之れを暗んず貞德の門に遊ぶや嶄然として頭角を露はし俳調は未だ古體を脫せざるも其雅韻亦た稱す可きもの少からず貞德より季吟に至つて大に見る可きものが多くなつて來た和歌連歌は勿論季吟得意のものであつた其名は次第に高くなつて來た元祿二年幕府に召され法印に叙し林昌院と號して祿五百石を賜はり歌學所の長に補せら

る其全盛も亦た思ふ可し蕉翁の其門下に遊んで修養する處の深きは勿論であるが彼の正風體を振興し名を天下に輝すに至つたは季吟は能く蕉翁の才を認めてこれを引立たのである寛永二年六月十五日歿す享年八十有二（又は八十五と云）其吟に（一僕とぶく〳〵ありく花見かな）ありて世人の稱揚する所なり。

山口素堂

山口素堂は甲斐國巨摩郡教來石村字山口の人なり名は信章字は子晋通稱は官兵衛と云父を市右衛門と云其長男なり寛永十九年に生る芭蕉より長ずること二歲なり甲府魚町へ移轉して酒折の宮に仕へ家富有なり夙に文學を好み家を弟に讓り江戸に來り林春齋の門に學び又た京都に趣き和歌を清水谷家に學び連歌を季吟に學び茶道を今日庵宗旦に學んで今日庵の三世となる其他の諸藝は概ね通ぜざるものなし季吟の門に入るや芭蕉と同門生として相交り意氣相投ず又た江戸に來り居を東叡山下に占む天和中又た葛飾郡阿武に移る芭蕉の住する六間堀から舟で小名木川を往來する便もありて一層親密を極む庭前に池を穿ち白蓮を植え晋の惠連の蓮社に擬す性頗る義氣に富んで鄕民の爲めに笛吹川疏水工事を完成して山口靈神として祭らるゝに至る此疏水工事は芭蕉も朋友の爲めに關係したりと云俳道に於ては葛飾の祖として世に稱せられ名句少なからず芭蕉常に畏敬して呼ぶに先生を以す又た芭蕉の獨貧を憐み常に之れを助力す其義氣に富み學才共に秀でゝ芭蕉が彼正風體を定めたる時にも素堂が意見を問ひ自分の意見をも打明けて謀る所ろ多かつたと云享保元年に至り年七十五にて世を終ふ其の鎌倉に遊ぶ時に吟あり（目に青葉山ほとゝぎすはつ鰹魚）當意卽妙にして人口に膾炙せり。

平野杉風

平野杉風名は一元通稱は藤左衛門又た五兵衛と云江戸小田原町の魚商にして鯉屋こも云ふ又た採茶庵鶴歩簑笠茶庵の號あり兄仙風と共に俳諧を好む家富有にして義俠を好む仙風死後其産業を繼ぐに及びて聾耳なるを以て大に惱めり季吟の門に入るに至つて芭蕉と莫逆の友たり芭蕉の獨貧を援く

るや杉風の一家擧て其住居及び日々の生計にも注意怠らず芭蕉の他日斯道に成功を得たるは此の援助に由ること實に淺からざるを知る且つ又た書翰の多かる中に左の一書あり。

新麥一斗　筆三本　油のやうな酒五升と富貴の沙汰なり。
蕎麥粉一重　小遣錢二百文　忝存　參らせ候。

水油なくて寢る夜や窓の月

枕屏風むだ書いたし卽ち御使に相渡し申候襦袢の洗濯糊少々と御申付可被下候。

杉風樣

をふくろ樣

口上に書き落しけり土大根

此の書翰を見ても杉風一家擧げて芭蕉を助力せし一端を知るにたる杉風は一人の娘あり姿色甚だ艶なり杉風深く之れを愛し一吟あり（紅梅はむすめすまする妻戸かな）後年其娘の死せしかば（いさよひや我身にしれこ月の缺）一句の吟に悲哀悼痛の情溢れて徐かに悽然たらしむ享保十七年六月十三日歿す享年八十有六。

書翰　其角去來より松尾半左衛門に送りし書

態〳〵一人差立候益御平安可被成御座奉恐賀候皆共無異罷在候御安意可被下候然者尊師於大阪御大病之處支考惟然より申進候得共御返答無御座遠路故紙面遲着と察候兎角仕候中拙者共茂罷下り加御保養候得共御養生不被爲相叶去十二日終に御遷化被遊候旅中之儀に御座候故其夜早速近江木曾寺に尊骸を奉遷十四日迄御報奉待候得共御返答不承候間諸國門人中一等評議にて則十四日之夜於木曾寺埋葬仕候委曲は追々土芳卓袋歸國之上にて御承知可被下候

一別封の一書は師翁御遷化の日御認被遊候御遺書にて御座候上書迄にて御封緘は其時より無之候條左樣被思召御落手可被下候

一御遺物の品々は諸國連衆於義仲寺集會之上書記之通無相違候條今度御來臨も御座候はゞ御見屆之上任御取計申筈に候得共御左右無御座候故不得止取計覆目錄入御覽申候御親類方にも乍憚此

旨被仰達可被下候土芳卓袋歸國口述之上御返書被成下度候一七日御追善供養相仕廻申候故諸士一同引取申候筈に候條願くは御返書承り申度候書餘兩雅子に御聞可被下候以上

去來
其角

十月十九日
松尾半左衛門様

別封遺書

御先に立候段殘念に可被思召候如何様こも又右衛門便に被成御年被寄御心靜に御臨終可被成候○○申上事無御座候市兵衛次右衛門殿意專老初不殘御心得奉賴候中にも十左衛門殿半左殿右之通に候まゝ様およし力落し可申候以上

桃青

十月十日
松尾半左衛門様

新藏は殊に骨被折忝候

別啓昨日之俳諧百韵入貴覽候

一御遺物目錄之外に左之通相殘居候品御綿入一着御袷同前御肌付同前御帶二筋右は花屋仁左衛門より一昨日次郎兵衛方に贈參候外に古御衣裳の類數多有之候は大阪出立取急候故不殘花屋に預置申候

一御飛脚只今參着被致尊翰拜見仕候御返事仕候筈に候得共用相認○○申故貴答不仕候

一壽貞子次郎兵衛御國出立の砌より御供仕居候御病中始終御葬埋の節より拔群の骨折被仕候逐一兩雅より口述に可及候御病中間の始末御病體惟然支考次郎兵衛拙者迄筆記入貴覽候以上

松尾半左衛門より去來其角への返翰

巨細之御書翰忝拜誦御揃益御安泰被成御暮候由奉遙賀候然者今度芭蕉事於大阪致遷化自病中木曾寺葬埋迄不殘御苦勞被成候由御文面と申土芳卓袋よりも微細に致承知候惣御連中別て兩雅丈之御厚情之程御禮難申盡候芭蕉事一所不住之境界に候條斯く可有こは兼て思儲居候得共今更殘念御推察可被下候作病中始終御介抱之事假令親族之面々附添居候共斯迄手は屆き不申亡弟身に取りて他方之聞親類中之美目身に餘り忝奉存候

一自大阪兩度之御手簡之中二日之御狀而已漸十二日之暮方に屆候外之御狀は未だ相屆不申候芭蕉病氣大切成義は及御知候故早速使者差出候最早日限過候得共未だ病氣にて有之許こ存候使之者歸り候者十六日之朝罷歸候て其遷化之事も遺骸まで近江之樣々送方被成候義も致承知候卓袋土芳近江之樣被參候義も今度承り候被追取返し一人差立候今度は拙者馳參申苦に候得共亡弟爰元發足之跡にて拙者瘧疾勞然も初瘧こ申老人之事にて候故長々相痛漸九月下旬致快氣候瘧後今以服藥いたし出勤も不仕氣力も未得不申候不能其義諸風子之御聞前恥入申事に候

一芭蕉遺狀正に落手候誠に一類中打寄開封何茂一字一涙愁傷御察可被下候

一亡者遺物之儀に付被仰越候趣御入念之義に候併亡弟入道以來は俗緣之表向無之候僧分之器財之事に候條遺言之品は格別其外は不依何品直に義仲寺に寺納可有之猶哉又御連中任思召候間御存寄次第宜敷御取計可被下候

一壽貞子次郎兵衛事今度信切に骨折始終之事感入候存寄も有之候勿論譜代之者に候故其元諸事相仕廻申候こゞ一日成共早罷歸候樣乍慮外被仰入可被下候

一相殘居候古衣裝四品被贈下慥に致落手候外に古衣裝之類花屋に預け被置候由右之品は必御貪着被下間敷其儘に被召置可被下候余情拜顏申殘候以上

晋　其角樣
向井去來樣
御連中樣

追啓御飛脚道違にて踏迷申され殊に痛所有之由に候間中一日手前にこゞめ申候爲念申進置候以上

別啓申進候芭蕉死去之事拙者主公同役共を以て申達候處主公甚殘念に被存夫に付辭世は無之哉之事故尋候故土芳卓袋口述之通申達之得は貴丈方之紙面直に可被致披見この事任其旨申候處重て尋に命終迄に發句は無之哉若有之候はゞ直書見度こ申事に候若貴丈方外々御所持之方も候はゞ暫く拜借申度此段御賴申候

一自筆之山家集有之候はゞ書入杯者無之哉有條々宜敷御賴申候爲其重て如是御座候謹言

松尾半左衛門命清判

十月廿三日　松尾半左衛門

其角様

去來様

奥書之頭陀之内之品之中五寸に六寸之切之事並に松島象潟の繪之事が望之由其外何品によらず隨分御勝手次第に可被成候少も不苦候以上

松尾半左衛門より義仲寺に禮書

以使札得芳意候向寒之節に候得共益御安泰御寺務可被成恭賀候拙者無別條罷在候然者芭蕉居士被致遷化候砌葬式之節は段々御苦勞被成下忝奉存候早速罷越御禮詞等申述候筈に御座候得共乍存疎略打過背本意候此段御宥恕可被成下候隨て左之通〇〇納仕候間宜敷御回向被成可被下候拙者も長々之病後今以引入居申候出勤仕候得ば早速墓參可仕候其節拜顔之上萬々申上候先右之御禮詞迄如斯御座候以上

十一月二日　松尾半左衛門

義仲寺様

覺

一御布施　金二百疋

一同御佛米御齋米料　同二百疋

一同御茶湯料　同百疋

一御布施　同百疋

右

露沽より弔詞

以飛札得御意申候益御淸雅奉賀候及許無異に居申候然者帥翁遷化之事承り途方に暮候いかに成行可申哉只闇夜こ相成唯愁涙迄に候取あえず一句案候靈前に御敬手可被下候以上

十月廿三日

去來雅丈

告て來て死顔ゆかし冬の山　露沽

此外諸國の弔儀數百箇所より來るも繁雜なる故に記載せず

贊に曰く宗房の俳句を以て名聲を天下に著はし世人擧て其絶作を感歎し詞壇の覇旺として之れを尊稱するも余れの以て滿足する能はざる所なり何となれば宗房の良忠に用られ君臣遭遇魚水の親み深厚なり良忠の死するや宗房は良主を失ひ悲慟落魄して決然世を去る良忠は一國の重臣なり短命にして國家の重任を握るに至らずこ雖も宗房の失望するを以て益ます良忠が凡庸の主に非ざるを知る嗚呼宗房は天下の偉人なり若し良忠をして國政を執り宗房をして之れを輔佐せしむれば其功業卓絶千古人をして欽仰せしむるもの知る可きなり夫れ宗房が世を去り身を詞界に投じ高山大澤を跋涉して長風に嘯き閑月に吟ずるもの其豪膽灑々得意の佳境に在るが如きも若し宗房の心を問へば徒らに風騷の身こなり區々の詞句を吐きて纔かに鬱悶を排するなりと謂はん耳み故に曰く良忠が死を哀み宗房の爲めに惜しむ。

終

大正十一年十一月十一日印刷
大正十一年十一月十五日發行

定價十二錢

著作者　白井雲厓

發行者　三重縣阿山郡上野町西ノ丸一九三〇番　多羅尾光雄

印刷者　大阪市西區阿波座上通一丁目一九番地　橋本正隆

複製不許

發賣所　伊賀上野町驛構內　日新堂

W7
5/2

終